一部復帰への道　―2020 関西インカレ観戦記―

大阪市立大学陸上部監督　笹倉英男

10 月 20 日から 4 日間、関西インカレを観戦しました。不朽の名作「2019 年関西インカレ観戦記」の筆者安藤博史氏（1976 年卒、現コーチ）の教えを受けながら、我が校選手の出る種目を全て観戦しました。４月に監督に就任するも、新型コロナ感染対策のため７月末まで大学に行けず、その後感染状況が若干改善して、やっとのことで１０回程度市大のトラックとヤンマー・フィールドに記録会の場外観戦で行くことができました。そのため、私自身は学生全員の顔と名前も一致しないまま本大会を迎えました。結果報告と感想を織り交ぜて、名前の間違いを恐れることなく、一部復帰までの道のりを「観戦記」にまとめてみました。

大会は、新型コロナ対策のため一般の観客は競技場に入れず、出場選手と決められた人数の支援者のみが入場できる条件で、開催されました。開催に当たっては、コロナ禍による幾多の難関を乗り越えて本大会に漕ぎつけた関西学連の運営に、４回生中沢君が幹事長として携わっていたことを紹介しておきます。お疲れさまでした。話を戻します。観覧席に空席が多く、見たい場所でゆったり見ることができたのは良かったのですが、観客の絶対数が少ない上に声援も禁止されており、いつものインカレのような盛り上がりはありませんでした。鶴谷先輩や灰藤先輩、岡本先輩等の常連の他、久々に懐かしい OB・OG が突然現れることもなく、全体として寂しい大会と言わざるを得ませんでした。そんな雰囲気を打ち消す唯一の救いは、一部復帰を目指す現役諸君の頑張りです。一つの目標を持って走り、跳び、投げる姿を見て、私は感動の連続でした。何の力にもなっていないのに、このような歴史的瞬間を迎えようとしている時に偶然監督になって良いのでしょうか？

観戦記に移ります。１日目、一番のポイントは三段跳決勝です。「公式予想」（OB・OG 係の田中さん作成で以下同じ）は１２点です。次に、男女の 100m と 400m、男子 110mH と 4×100m の各予選で何人（チーム）が決勝または準決勝に進出するかが第二のポイントでした。一部昇格への得点争いとは無関係ですが、歴史を創りつつある女子にも注目しながら、競技時間順に観戦を進めることにします。

女子 400m は３回生田中さんが出場予定でしたが、怪我のため３日目の 800m と共に出場が叶いませんでした。進歩と怪我はトレーニングの両面です。あきらめずに次を目指してほしいと思います。男子 400m は５回生徳田君が順当に予選通過、３回生後藤君は前日の決意表明通りスタートから飛ばし、その後も粘りに粘りましたが、50 秒 42 の４位で予選通過はなりませんでした。

女子 100m は２回生寺田さんが出場、自己記録から見て満足いくものではなかったと想像しますが、怪我に負けることなく 12 秒 95 で最後まで走り切りました。続いて男子 100m、４回生小林君と３回生小田原君は大局を考えて棄権、３回生宮本君だけがスタートに着きました。リレーを考えてのことか、体調不良のためなのか私には分かりませんでしたが、恐らく本人には不満な記録に終わり、準決勝進出はなりませんでした。市大記録保持者の矜持に期待して、復調を願うばかりです。

男子 110mH は、４回生福田君が予選１位で決勝へ。２回生細谷君は 15”19 の自己新ながら決勝進出はなりませんでしたが、後日の 400mH に繋がる走りではなかったでしょうか。

男子 4×100mR は順当に１位で予選を通過しましたが、メンバー（１走から順に、宮本君、福田君、小林君、小田原君）による自己診断は「安全運転のバトンパスではあるが、タイムが遅すぎるので決勝に向けてできるだけの準備をする」とのことでした。気合だけに頼らず、「できるだけの準備をする」冷静さと

行動力に感心しました。

競技はフィールドに移り、今や市大のお家芸とも言える三段跳です。４回生の安達君と源君、１回生の植木君が今大会市大初の入賞を目指しました。観戦者としては「もうちょっと気楽に見せてくれる」と言いたくなる試合経過でした。植木君が１回目に 14m44（決勝記録）を跳んでベスト８をほぼ確実にしましたが、安達君と源君がなかなか決められず胃が痛くなる思いでした。最終的には、3 回目に源君がベスト 8 入りを決めました。安達君は故障を抱えていて次に進めなかったのはやむを得ないのですが、13m96 の記録で出場者全体での順位は「公式予想」を上回っており、この鬱憤を走幅跳で爆発させてほしいと思いました。ベスト８では植木君が２位、源君が３位で計 13 点を取り、「公式予想」を１点上回ります。源君が 6 回目に 14m42 を記録して上位進出を果たしたのはさすがでした。一方植木君は、恐らく実測はベスト８進出者で一番と思われましたが、5、6 回目で足が合わず惜しくも優勝を逃しました。若さが出たと言わざるを得ませんが、末恐ろしい選手と言っていいでしょう。

１日目終了時点で、びわこ学院大が 10000m で 21 点を獲得し１位。ライバル阪大は７点ながら短距離の予選通過者が多数いて、２日目以降入賞者を増やしていくものと思われました。我が校は大きな取りこぼしなく７点を獲得し、２位摂南大に続き阪大と共に３位で順調にスタートを切ることができました。

2 日目です。天気は昨日に続き暖かく晴れました。市大出場の決勝が 5 つあり、対抗得点を大きく左右する１日です。勿体ぶらず、先に結果を書いてしまいましょう。110mH、1500m、4×100mR で優勝、砲丸投げ 2 位、400m3 位と 5 種目すべてで表彰台（表彰式は感染対策のため実際は無し）、砲丸投の 7 位入賞もあり、合計 39 点を獲得しました。昨日との合計で「公式予想」を 7 点上回りました。競技順に観戦しましょう。

まずは砲丸投げです。4 回生の実力者三浦君が直前の肉離れのため「腕だけで投げ」たそうですが、「ウエイトが趣味」だけあって 12m81 で堂々の 2 位、幸先のいいスタートとなりました。3 回生の奥井君も大声と共に自己記録に迫る記録 12m06 を投げて 7 位入賞。1 回生廣瀬君はキャリア不足で苦杯を嘗めました（10m73）が、華麗なる回転投法を披露し、投てき陣の明るい未来を予感させてくれました。

午後になって、トラックは 1500m 予選からです。１組は１回生の岡嶌君が故障を抱えながらも 4 分 03 秒 11 の記録で 4 位になり、プラスで拾われて決勝進出。２組、５回生の伏本君も気合の入った走りで自己新記録 4 分 06 秒 31 を出しましたが、7 位でプラス 3 には届きませんでした。４組、５回生の矢守君は余裕の走り、3 分 57 秒 97 の１位で決勝へ。中距離グループの充実ぶりを目の当たりにしました。

ここから、決勝が続きます。１番目は 110mH。「優勝確実」のプレッシャーに負けることなく福田君が 14 秒 19 で「テープを切りました（この言い回しは昭和の人しか分かりませんかね）。」目標の大会新記録樹立はなりませんでしたが、自己タイ記録の走りは圧巻でした。おめでとう。

約 2 時間後に 400m決勝。５回生徳田君が「入賞を目指し」ました。好スタートから終始 3 位をキープし、ラストで追い込まれながらも渾身のラストスパートで 3 位（48 秒 92）入賞。スタンドでは安藤コーチと私は 4 位から 6 位の予想をしていたことを白状しておきます。ごめんなさい。この時点で得点に余裕ができました。

1 時間後、1500m 決勝にエース矢守君と「秘密兵器」岡嶌君の登場です。矢守君は学業の関係で本職の 800m にエントリーできず、1500m にすべてを投入しました。スタート直後から先頭を取り、牽制の多いインカレの 1500m では珍しく 2 位以下を大きく引き離しての独走で、そのまま 3 分 52 秒 46 でゴールしました。見た目は楽勝でしたが、レース後の勝利者インタビューで「大会記録を目標に」走ったが「800m から先はどうなるか分からなかった」と聞き、実は失敗覚悟の勇気ある走りだったと知りました。一方、

岡嶌君は軽い肉離れを押してスタートを切りましたが、「800m 付近で具合が悪く」なったので完走に切り替えたそうです。今後に期待です。

２日目最後は４×100mR 決勝です。予選で思い通りの記録が出なかった上に、直前まで走者が決まらず、選手たちは不安だったでしょうが、観戦する我々も不安で一杯でした。安藤コーチによれば、当日の朝に大学で走者を決めるための決定戦をしたそうです。決勝のメンバーは１走から、２回生大内君、以下福田君、小林君、小田原君でした。安藤コーチと私の予想は２位。実際のレースは１走大内君の好走によるリードを最後まで守り切って 40 秒 35 で優勝。２位阪大との差は 5/100 秒で記録からは「辛勝」でしょうが、レース内容は「完勝」でした。予選の後やれることはすべてやり、本番で持てるものをすべて出した、と口で言うのは簡単ですが、それを支えた底力と自らの力を信頼できてこその快挙だったと思います。関西インカレでのこの種目の優勝は 1975 年以来 45 年振りであったことを付け加えておきます。コングラチュレイションズ！２位の予想は忘れてください。

２日目終了時点で、我が校の対抗得点は 52 点、順位は２位。１位は阪大（57 点）、３位はびわこ学院大（31 点）でした。現時点では予想以上の出来です。あと２日間、油断せず、集中を切らさず、２部優勝と一部復帰を目指して「頑張りを楽しんで」ほしいと願って家路につきました。気の早い OB からは「一部昇格確実ですね」のメールが来ましたが、逆に気が引き締まりました。

３日目。大事な１日です。どの種目も取りこぼすことなく阪大に喰らい付いて行かなくてはなりません。我が選手たちは期待以上にそれに応えてくれました。

９時半開始の走高跳に３回生の角本君が挑みました。ベスト記録が 1m90 なのに 1m85 からのスタートのため、「決意表明」では跳べるかどうか心配していましたが、見事２回目に 1m85 をクリアーしました。1m90 は一瞬イッタと思いましたが惜しくも失敗。しかし、本日最初の種目であり、跳躍には不利な朝早い競技時間にもかかわらず自己記録に迫る結果を出したことは、我が校にとって以後の弾みになったと思っています。

10 時からは走り幅跳びに三段跳トリオが再度登場。源君が６回目の跳躍で 7m11 を跳び２位に入賞しました。勝負強さに脱帽。安達君は渾身の跳躍でしたが惜しくも着地点の手前に手がついたように見え、植木君は踏み切りが決まらずベスト８進出を逃しました。個人種目ながら、跳躍両種目で 21 点獲得は３人のチームワークの賜物と言えましょう。

200m 予選はまず女子から。期待の１回生村上さんが準決勝進出を逃すも、見事に 25 秒 48 の市大新で走りました。４０数年前、私が現役の時に初めて女子マネージャーが入部し、その後現役競技者が少数ながら続きました。女子の歴代記録表がある現在とは隔世の感があります。監督在任中に、女子も得点争いをしたいものです。

男子 200m 予選は小林君と１回生の田村君です。小林君は軽く通過。田村君は 25 秒 94 で準決勝進出はなりませんでした。少し力みはありましたが、参加標準(B)記録が 22 秒 75 なので、本調子でなかったのだろうと察します。

次の 800m 予選には４回生福宮君と３回生小坂君がレースに臨みました。岡嶌君は怪我を考慮して棄権。まず１組に福宮君、最後は流して悠々の１位通過でした。４組の小坂君は「調子が上がっていない」ので「楽しみたい」とのコメントでした。２分 05 秒 26 でゴール、次のチャンスは調子を合わせて実力を発揮してください。

午後になって、上位入賞期待の円盤投げです。４回生の藤林君がそれに応え 39m02 を投げて２位入賞。本人は「リキんだ」とコメントしていましたが、力の入り様は我々観戦者にも伝わってきました。１回生

廣瀬君は力が円盤に伝わっていなかった様で 28m80 でベスト 8 には進めませんでした。今後に期待。
　続いて決勝で大量得点が予想されている 400mH 予選です。出場順に、福田君、細谷君、徳田君の 3 名全員が順当に決勝へ進みました。
　さて、200m 準決勝に小林君の登場です。出発直前に「体がよく動き、風も理想的なので大会新を狙って走る」と告げられ、結果を信じて観戦しました。20 秒 88 の大会新記録を樹立して決勝へ。有言実行の走りでした。速報記録が表示された時は、声援禁止の会場に大きなざわめきが起こりました。一言、速かった。決勝を待たずにボーナス点 5 点をゲットしました。
　5000m は 4 回生の平松君が力走。「アップが苦しい」ほどのシンスプリントを抱えていましたが、見事 16 分 44 秒 33 で耐え抜きました。
　本日の最終種目は 4×400mR 予選。まずは、女子から。3 回生大和さんを 1 走に以下村上さん、4 回生南さん、2 回生菅野さんのオーダーで臨み、4 分 10 秒 28 でゴール、決勝進出はなりませんでした。因みにこの種目は 1984 年の関西インカレで 6 位入賞の実績があります。その時の記録は 4 分 20 秒 56 でした。
　男子は、1 走から徳田君、後藤君、福宮君、福田君のオーダーで、予選に臨みました。軽く 1 位通過を果たし、最終日の決勝に駒を進めました。
　3 日目も取りこぼしは無く、対抗得点は 66 点で 2 位を維持しました。1 位は阪大の 85.5 点で予想以上に加点しています。3 位はびわこ学院大の 57.5 点。最終日の各校の予想得点を考慮すると、一部復帰が現実味を帯びてきました。油断さえなければ実現するでしょうが、見ている限りそのような心配はなさそうです。選手たちの集中力と頑張りには目を見張るものがあり、信頼して夢の実現を待つ心境でした。

　最終日。大目標は言うまでもなく一部復帰ですが、なんとこの時点でフィールド優勝の可能性もありました。あわよくば二部優勝、4×100mR 優勝に続き 4×400mR で 2 連勝も…と、可能な目標を挙げれば切りがないので、邪念を捨て、1 部復帰を本命、絶対、マスト、唯一の目標に据えて観戦することにする。すでに、矢守君の「勇気の走り」、小林君の「有言実行」の大会新、4 継の「完勝」始め 2 位以下の入賞者も渾身の走り、跳び、投げを見せてくれていて、これ以上の欲は掻けません。
　4 日目は久しぶりの場外で、しかも雨中での観戦となる。散歩の人や犬と一緒に競技場北側の門外から、まずはやり投げ決勝を見ました。砲丸投げ入賞の奥井君が出場、2 投目以外は試技毎に記録を伸ばし、ベスト 8 に残りました。ところが、何故かベスト 8 進出者の場内紹介がなく、この間に学んだ彼の性格から察するに、さぞかし残念だったのではなかっただろうか。結果は 54m13 の 8 位で 1 点にとどまったけれども、私はこの時点で 1 部復帰を確信しました。他校の状況等あらゆる事態を想定して計算した予想点からは理性的な確信を、奥井君の執念の掛け声と気持ちの入った投てきからは根拠のない確信を貰いました。
　12 時 25 分、我が校出場のトラック決勝種目が始まります。最初は 3 人フル出場の 400mH。結果は、期待に応えて 1、3、4 位で 19 点獲得。これも言うは易しですが、選手個々のメンタルは想像を超える重圧に満たされていたことでしょう。1 位福田君（51 秒 20）、3 位徳田君（52 秒 40）、4 位細谷君（52 秒 93）、ご苦労様でした。
　13 時 10 分、昨日大会新記録で準決勝を通過した小林君が 200m に登場です。疲労と雨と風から考えて好記録は望めない状況でしたが、一部でも優勝を争えた 21 秒 16 の記録で圧勝しました。アッパレ。
　13 時 45 分、800m 決勝に福宮君が挑戦、優勝を目指しました。結果は 1 分 52 秒 81 で 2 位、1 位とは 22/100 秒差でした。積極的に優勝を狙って走る姿勢が随所に見られましたが、優勝者の巧みな作戦にやられました。本命矢守君が不在の中での孤軍奮闘は立派でした。
　14 時 35 分になって、個人種目最後は 3000mSC、4 回生の三木君が力走しました。場内に入れないので

水濠付近を見るしかなかったのですが、そのお陰で彼の水濠での飛翔が美しいことに気付くことができました。10 分を切る成績（9 分 54 秒 41）は十分評価に値すると思います。

15 時 45 分、最後の最後、市大の看板種目 4×400mR の始まりです。熟慮の末（と想像します）、1 走から順に徳田君、小林君、福宮君、福田君のオーダーで臨みました。敵は他校だけでなく多種目出場で蓄積した疲労（例えば、福田君は本稿の全ページに登場）、故障、精神的プレッシャーも半端ではありません。安藤さんに「落ち着きがない」とからかわれながら観戦。阪大と文字通りの一騎打ちになりました。結果は 17/100 秒差の 3 分 12 秒 14 で 2 位でした。走りの内容に責められるべきものは一切ないのですが、何故か悔しい。選手たちは何倍も悔しいのでしょう。「それでいいのだ」と思います。「100%出し切ったから満足」と言ってしまえば進歩は望めません。悔しさは一流選手の最も大きなエネルギーのひとつです。

こうして絶対の目標「一部復帰」を達成、何せ 43 年ぶりですから部にとっては歴史的快挙です。喜びに浸ってください。その裏に隠れた個人及び部レベルでの悔しさも忘れないでください。泣き明かして将来の糧にしてください。

こうして 4 日間の関西インカレが終了、男子は総合得点 113 点で二部準優勝、大阪大学と共に一部復帰を果たしました。女子は無得点に終わりましたが、手が届きそうな種目もありました。2021 年の大会は、男子は当然一部残留を目指し、女子は一人でも入賞することを目標に「ガラスの天井」を壊す努力をしましょう。どちらも簡単ではありません。“Easy come, easy go.”という諺があります。一部昇格は “easy come” ではなかったはず、簡単に “go” させたくないですよね。困難であるが故に魅力的な目標に向かって、頑張りを楽しみましょう。

（完）